

# 頭陀袋

54

平成二十八年十二月号

発行 中山かんのん

恩林寺



中山中学下、電話三四一一二四五

## \*道を修める

人間の心は弱いものです。自分が何かをやりとげようと決意し、目標を定め、予定までもたてていて、いざ、その仕事をやりだすとなかなか思うようには進みません。いつの間にか、怠け心が出て「もう、いいか。」と断念してしまいます。最初の決意の通りにはなかなかうまくいかないものです。佛教ではこの怠け心のことを煩惱と呼んでいます。煩惱とは「身心を患い悩ます心」の事です。

それは、とらわれの心、ということができず、よう。とらわれの心、と言ってもいろいろなものがあります。なかでも、もっとも大きなものは、自分に対するとらわれです。ようするに「わが身かわいさ」というものであり、自己中心のものの考え方です。すべてが思うようにならないのに自分中心にものを考えうまくいかないと腹を立てあれこれ理由をつけて他人のせいにしてしまいます。

經典の中に 自分よりいとおしいものをみつけることはできない。 他の人びとにあつても自己はこの上なくいとおしい。 と、言う言葉があります。この経文が示すように、たとえどんなに愛し合っている恋人であつても結局、自分以上に愛おしいものはないのです。だれしも一番かわいいのは我が身です。そしてその我が身かわいさはひとの持つ煩惱にあるのです。それなら身勝手な自分を変えるためには煩惱を取り除けばいいのですが、そう簡単にはゆきません。中には煩惱のある事すら気が付きません。釈尊は早くからこのことに気づかれ、ひとびとに煩惱を捨てる様々な方法

を教えられました。

ところで仏教はもともと「仏道」と呼ばれておりました。宗教としての仏教という言い方は実は明治時代になってからの呼称であつてそれ以前は仏道という呼び方が普通でしたそれには「仏の道」「仏に至る道」という意味が込められています。それはぬぐい難い煩惱を取り去り悟りを得ようということでした。その方法が「道」であり、釈尊はこの道、すなわち方法をおとぎになったのです。これは八正道と呼ばれております。「正精進」「正しい見解、正しいものの見方をする。佛教の道理になつた正しい見解に基づいて正しく努力することを言います。釈尊のお弟子に（ハンダカ）という方がありました。この人は（愚かなハンダカ）と呼ばれていました。釈尊の言葉を何か月たつても覚えていけません。実の兄からも見放され、精舎の外で自分の愚かさを嘆き悲しんでおりました。そこへ通りかかった釈尊はその事情を察知し、ハンダカに一本のホウキを与え、これで精舎を掃除しなさい。と命ぜられました。ハンダカは毎日毎日、黙々と掃除を続けているうちにホウキはいつの間にか、すり切れてしまいました。ハンダカはこれにより形あるものには、いつかは必ずこわれてしまふものであることを知りました。愚かなハンダカもこうした経験を積んで、ついにはさとりを得たといわれております。私たちは自らの分としようものをよく知り、おごり高ぶることなく常に理想にむかつてハンダカのように必要以上に構えることなく、焦らず、地道に努力しなければなりません。

お寺の年末年始の予定

十二月三十一日午後十一時 除夜の鐘

どなたでも鐘が撞けます

一月一日 午前九時より 下岡本三寺参り

新年互礼会 願生寺、真光寺恩林寺

一月二日より五日まで住職が檀信徒様宅に年始